

第19回 DAY 賞 受賞者略歴

Distinguished Alumni of the Year – March 30th, 2024

(敬称略、卒業年順)

吉川 元偉 YOSHIKAWA, Motohide

18期 ID74 社会科学科, 1974年3月卒業
国際基督教大学特別招聘教授、元国連大使

元外交官。ICUでは「外交官になって平和に貢献したい」との強い思いから、国際法を勉強し、1974年に外務省に入省。スペイン留学ののち、アルゼンチン、英国、フランス、タイ、米国等での勤務を経て2006年にスペイン大使に就任。その後も初代アフガニスタン・パキスタン支援担当大使、経済協力開発機構(OECD)代表部大使、国連大使・常駐代表などの要職を務めたのち、2016年に外務省を退官。翌年からは、ICUの特別招聘教授を務めつつ、外交官や国際公務員を目指す学生の育成に努力している。スペイン、アルゼンチン、モロッコ、モンゴルより叙勲され、英語の他、スペイン語、フランス語も堪能。

Professor Yoshikawa: An ex-diplomat. With a strong desire to become a diplomat and contribute to the peace, he studied International Law at ICU and joined the Ministry of Foreign Affairs in 1974. After having studied Spanish in Spain and worked in Argentina, the UK, France, Thailand, the US, he was appointed as Ambassador to Spain in 2006. Later, he held various important ambassadorship such as the first Special Representative for Afghanistan and Pakistan, Ambassador to the Organization for Economic Co-operation and Development (OECD) in Paris, and Ambassador/Permanent Representative to the United Nations in 2013. After retiring from the Ministry of Foreign Affairs in 2016, he has been serving as Distinguished Professor at ICU from 2017. At ICU, he has been helping those students who aim for careers as diplomats or international civil servants. He received decorations from Spain, Argentina, Morocco and Mongolia. He is fluent in English, Spanish and French.

八田 陽子 HATTA, Yoko

19期 ID75 語学科。1976年3月卒業
味の素株式会社、広栄化学株式会社、および日本製紙株式会社社外取締役。小林製薬株式会社社外監査役。ICU評議員。

味の素株式会社、広栄化学株式会社、および日本製紙株式会社社外取締役。小林製薬株式会社社外監査役。ICUでは語学を専攻。卒業後子育てをしながら米国公認会計士の資格を取得し1988年に、Peat Marwick Main & Co. (現 KPMG LLP NY)に入社。主に日本企業の米国子会社向けに「米国の税務」サポートを行った。2002年に帰国後は、ピートマーウィック税理士法人(現 KPMG 税理士法人)のパートナーとして主に価格移転問題を担当した。NY在住時はICU同窓会北米部支部長。

2023年5月まで学校法人国際基督教大学の監事を15年間務め、現在も学校法人評議員や同窓会の監事を務めるなど母校への直接的貢献を続けている。

Independent Outside Director for Ajinomoto Co., Inc., Koei Chemical Co., Ltd., Nippon Paper Industries Co., Ltd., Outside Audit and Supervisory Board Member of Kobayashi Pharmaceutical Co., Ltd. At ICU, she majored in Language. After graduating and spending time as a family person, she joined KPMG LLP in New York in 1988 where she provided tax services mainly for US based subsidiaries of Japanese firms. When she returned as a partner of KPMG Japan, she mainly supported tax issues in the transfer pricing area. She Contributed to ICU as Chairperson of ICU Alumni Association in the Americas during her stay in NY.

She served as Auditor of ICU for 15 years until May 2023. She is continuing serving as a Councilor of ICU and Councilor of ICU Alumni Association.

ウィリアムズ (半田) 郁子 WILLIAMS (HANDA), Ikuko

26期 ID83 語学科, 1982年3月卒業

英国国教会司祭、聖路加国際病院非常勤チャプレン、ICU 評議員

ICU 卒業後、1989年に渡英。リーズに30年居住。2008年に日本人女性として初の英国国教会司祭となり、その後リーズ大学病院でチャプレンを務める。第二次世界大戦の日本軍捕虜収容所で過酷な体験をした元戦争捕虜の英国人との出会いを通じ、戦争の負の歴史に向き合い人と人が和解することの大切さを身をもって示してきた。2019年帰国後、キリスト教教派間の対話、夫である現 ICU 副学長マークウィリアムズ氏が推進する日韓学生の交流プロジェクト、ICU の学生・教職員と続けてきた読書会、ICU 和解フォーラムと呼んで開催する講演会や夏リトリートなどに携わり、一貫して「和解」を課題とした活動を展開。また ICU 内の自宅や、教員と卒業生と組んで毎月開く「てばなすぺーす」と呼ぶオンラインの集まりにて、ICU の伝統でもある学生との対話を続け、多くの学生に寄り合い続けている。

Revd. Ikuko Williams lived in Leeds, UK for 30 years from 1989. In 2008, she was ordained as a priest for in the Church of England, as the first Japanese woman to do so, and later served as a health care chaplain at the University Hospitals of Leeds. Through encounters with former prisoners of war, who were living with trauma-turned-anger from their experiences in Japanese prisoner of war camps during World War II in Southeast Asia, and through the unexpected experience of reconciliation with them, she has been advocating the importance of reconciliation between individuals living with the negative history of war.

Since returning to Japan in 2019, she has consistently promoted activities to encourage discussion on the theme of "reconciliation," such as organizing various book groups, speaker-events and summer retreats under the name of the "ICU Reconciliation Forum", contributing to an exchange project between Japanese and Korean students organized by her husband, current ICU Vice President Mark Williams, and practicing ecumenical Christian ministry. In addition, she continues to offer a listening presence and spiritual support for students, at her home in ICU, which is part of ICU's tradition, and through 'Tebanaspace', a monthly online listening space which she co-runs with a member of faculty and a graduate.

第19回 DAY賞 同窓生へのメッセージ

吉川 元偉 YOSHIKAWA, Motohide

18期 ID74 社会科学科, 1974年3月卒業

DAY賞を頂き光栄に思います。

私は、1974年にICUを卒業後直ちに外務省に入省し、2016年に退官後2017年からICUに奉職しています。自分の人生を振り返ると、高校で1年先輩だった末吉高明さん(16期)に会ってなかったら、多分ICUには来てなかったと思いますし、外交官を目指すこともなかったかも知れません。

奈良県立畝傍高校に入学したときESSの部長であった末吉さんから、AFS留学制度やICUのことを初めて聞きました。末吉さんは、目標通りAFS奨学生としてアメリカに行き、帰国後はICUに進学しました。私は彼の後を追ってアメリカに留学しICUに進みました。現在四国学院大学学長である末吉高明さんに感謝しています。

アメリカ留学は、自分の将来について考える機会になりました。帰国する頃には、外交官になろうとの気持ちが強くなっていましたし、ICUに進学することはすでに決めていました。

ICUでは、授業のほか、カナダハウスでの寮生活、柔道部、家庭教師のアルバイトなど充実した学生生活でした。授業は新鮮で楽しかったです。緒方貞子、横田洋三、Carl Kreider、福地崇生、細谷千博など多くの先生(全員故人)と卒業後も親交を続けられたことは幸運でした。幸い4年生の夏に外交官試験に合格できました。

私は、父親が4年間の兵隊生活と4年間のシベリア抑留という辛い体験をしたこともあったので、「戦争と平和」に関心がありました。42年間の外交官生活のうち、15年を東京で27年を外国で過ごしました。その間、中東アフリカ局長、スペイン大使、アフガニスタン・パキスタン担当大使、OECD代表部大使、国連代表部大使・常駐代表などを歴任し、多くのポストで「戦争と平和」の問題に直面しました。課長時代に自衛隊のカンボジア国連PKO派遣を担当したこと、「9.11」後のアフガニスタン復興に長らく関与したこと、局長時代に自衛隊のイラク派遣を担当したこと、国連大使時代には安保理理事国選挙に当選したことや地球温暖化に関するパリ協定に署名したことなどが思い出に残ります。世界各地に生涯の友人が出来たことも嬉しいことです。

外交官の仕事は、家族の協力なしには出来ません。多くの引越と転校を我慢した妻と息子たちに感謝しています。

ICUで教員を始めて7年になりました。私の目標は、「学生時代にこういう授業があれば取りたかった」と思うような授業を行うことです。毎年、一般教養科目の「国際関係とディベート」(日本語)、専門科目の「国連・国際機構論」(英語)、大学院の「外交と国際関係」(英語)を開講しています。ICU生は多様な才能を持ち教えられることが少なくないです。卒論指導もしていますが、国家公務員などpublic serviceに進む卒論ゼミ生が多いことに力づけられています。私の古巣外務省に在職する卒業生は近年大変増えました。

かつて国連で働く日本人職員の多くがICU卒業生だった時期がありました。ICUで

は、6年前から外交・国際機関を目指す学生向けの特別プログラム（通称 DIPS）を始めました。私も委員の一員として支援しており、ICU での恩師、緒方貞子先生がお亡くなりになった 2019 年以来、「緒方先生の遺されたもの」というテーマで毎年 12 月にシンポジウムを行なっています。緒方先生に続き国際舞台で活躍する人材を多く輩出したいです。

In 1974, after graduating from ICU, I joined the Japanese Diplomatic Service. I have been teaching at ICU since 2017, after my retirement from the Service in 2016.

I would not have come to ICU if I did not meet a friend when I was 15 years old. This friend is called Takaaki Sueyoshi(Class of 1973) who went to USA by an AFS scholarship and later went to study at ICU. I followed in his footsteps to go to the States and to ICU. Mr. Sueyoshi is now President of Shikoku Gakuin University.

My school life at ICU was very enjoyable. I met many teachers, including Mrs. Sadako Ogata, with whom I continued contact for many years. While still at ICU, I could pass the Diplomatic Service Examination.

I was always interested in issues related to “War and Peace”. It was partly because my late father had spent a very difficult time as a soldier for 4 years and as a prisoner in Soviet Siberia for 4 years. In my 42-year diplomatic career, I was given many interesting posts, such as Ambassador of Japan to Spain, Special Representative for Afghanistan and Pakistan, Ambassador to the OECD and finally Ambassador to the United Nations. During my entire career, the issues related to “War and Peace” were always in my mind.

At ICU, I have been teaching classes related to International Relations and the UN. My objective has been to motivate students to seek a career in public service such as diplomacy or international civil service. The ICU students today come from diverse backgrounds and their academic level is high.

八田 陽子 HATTA, Yoko

19期 ID75 語学科。1976年3月卒業

ICU時代の八田を知っている人は卒業後の私に大きな違和感を覚えているのではないかと思います。なぜ仕事をするようになったかを少しお話しします。お見合いをするはずだったのですが、ICUを卒業して4か月後に結婚し翌月には主人の都合でアメリカに渡りました。そこで主人の同僚の奥さま達が皆仕事を持っていて女性が仕事をする環境が整っているようであったことと、何もすることもないため仕事をしよう、そのために外国人というハンディを持っているため会計士の資格を取ることにしました。子育てを優先し、数年かけて会計の単位を每学期原則1コース分ずつ取得するという形で受験資格を得て米国公認会計士の試験を受け、36歳でNYのKPMGという会計事務所に就職しました。当時は米国への日本企業の進出が盛んであり、日本語ができたこと、グリーンカードを持っていたこと、会計士の資格を持っていたこと、等が8大会計事務所のうち2社から即 Offer があり1社から決まった後考え直してくれと言われた理由かと思っています。また入社に年齢制限が全くない米国であったことも影響していると思います。KPMGでは日本企業の米国支社、支店の税務を担当し、税務相談、税務申告、税務調査、等々合計11年間たくさんの会社のお手伝いをしました。クライアントにもいろいろ教えていただいたのですが、ICUで培われた、必要と思った際には相手の立場に立って、必ず理解してもらえるように助言をするという姿勢が役に立ったと思っています。そのせいか、クライアントからは「困ったときの八田だのみ」という言い方が何社かの間で共有されていたようです。その後2002年に日本のKPMG税理士法人に移り、主に「移転価格」問題という国際間の課税権の争いにまつわる税務問題を担当しました。

卒業後ICUとはあまり接点がなかったのですが、NY時代には同窓会で北米支部長であられたクリス和田さん(4期、卒業時名一和田定実)から日経企業に大きな影響を与えるカリフォルニアの法律改正を、議員を追いかけ、ヘリコプターを飛ばして成立させるご尽力をされた時のお話を伺ったりするなど、とても楽しい集まりでしたがクリス和田さんが急死されてしまいその後会長を務めてくださったソニーの宮崎貴子さん(24期)の後を引き継ぎ日本に移るまで支部長を務めました。2002年に日本に移る1年前に起きた911事件はアルムナイニュースで先日紹介されましたが同窓会の皆さまに大変お世話になりました。帰国後会計士ということもあったと思いますがICUの監事を昨年6月まで15年間監事を務めさせていただきました。この間に日本の企業および学校を取り巻く環境は大きく変わり「ガバナンス」が強化されました。法改正もあり、監事の責任が大変重いものとなるなか、2014年から会計監査に加えて業務監査の一部として教学監査を始めました。教学監査は、文科省の指導で少し前からすべきとされておりましたがあまり導入する大学は多くなく、ICUは私立大学の中では比較的早く取り入れたほうです。大変な作業を伴う監査で非常勤監事3名の体制で効率よく行うためいろいろ工夫を重ね、他校から参考にさせてほしいと問い合わせも頂きました。いかにICUを持続可能な大学にするか、学生にとって魅力的な大学にするか、そのために監事としてどのような観点からのコメントができるかを常に監事3名で相談しながら職務を果たしたつもりです。

現在4社の社外役員をしておりますが、基本的に会社へのアドバイスはICU監事の視点と同じです。どのように会社が成長しようとしているか、そしてどのようなコメントを

することが会社の役に立つかを常に考えています。立場上状況判断をしっかり行い、幅広い視点から全体を踏まえたコメントを行う、ただ言葉を発するだけではなく実際に何を言ったら何が動くかをしっかり押さえ、物事の本質がどこにあるか、うわべだけではないアドバイスをひるまず忖度なしに発言することが要求されます。「的をついたコメントがありがたい」などのお言葉をいただきます。このようなお言葉をいただける土台は、多様性を受け入れ柔軟な考え方をする力を身に着け、何が重要でどうすると解決できるかを考え抜くということをICUで身につけることができたからではないかと思っています。素晴らしい環境の中でリベラルアーツの教育を受けることができたICUに感謝しています。

After graduation, I got married and lived in the US. While raising two children, I took one course per semester to become a US CPA and obtained a job at KPMG NY at the age of 36. While at KPMG, I took care of tax matters including tax consultation, tax filing, tax audits, for U.S. branches and subsidiaries of Japanese companies. I learned a lot from my clients, but I believe that the attitude I developed at ICU of always putting myself in the clients' shoes and giving advice in a way that they would understand, was useful. Perhaps because of this, there seemed to be a shared saying among some of my clients, "Hatta is the person to call when you are in trouble". In 2002, I moved to Japan to work for KPMG Tax Corporation, where I mainly handled "transfer pricing" issues, which are tax issues related to international tax disputes.

Attending the meetings of North American Chapter at the ICU Alumni Association, I enjoyed hearing many Sempai's stories. For example, Mr. Chris Wada(Class of 1960), who was the president of the Association, the great experience about the time he chased a congressman and flew him by helicopter to have him vote to make the California law passed that had a great impact on Japanese companies. Before leaving US, there was 911 in 2001 which has been introduced by Alumni Magazine and I was very grateful to all the members of the Alumni Association for the great support they gave to me.

After returning to Japan, I served as ICU's auditor for 15 years until last June. During that time, the environment surrounding Japanese companies and schools has changed dramatically and "governance" has been strengthened. With the revision of the law, the responsibility of auditors has become very heavy, and in 2014, in addition to accounting audits, we started auditing teaching and learning as a part of operational audits. The Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology (MEXT) has been instructing us to conduct audits of teaching and learning for some time then, but not many universities have adopted such audits, and ICU was one of the first private universities to do so. We have devised ways to conduct the audits efficiently by three part-time auditors, which involves a tremendous amount of work.

I am currently an outside director of four companies, and my advice to the

companies is basically the same as the ICU auditors' perspective. I am always thinking about how the company is trying to grow and how my comments can help the company. I receive comments such as, "We appreciate your targeted comments". The foundation for receiving such comments is the ability to accept diversity, thinking flexibly, understanding that "one's way of thinking" is diverse, and that people always think through their own channels. Seeing things widely, and thinking through what is important and how it can be resolved from the standpoint of the people involved is the key to provide advice to others. I believe the foundation for receiving such comments is because I was able to accept diversity, thinking flexibly and learned how to think through what is important and how to solve problems from the standpoint of all the people involved at ICU. I hope that you too will have the opportunity to develop your individuality at ICU, where you are blessed with the ability to have your own way of thinking and utilize it for your work in the future.

ウィリアムズ (半田) 郁子 WILLIAMS (HANDA), Ikuko

26期 ID83 語学科, 1982年3月卒業

この度、DAY賞のお知らせを受け、非常に困惑しましたが、これまでの道のりでもたまに出会った「和解」というテーマについて、感謝を持って皆さんにお話させて頂くことといたしました。

私は、ICUではアメリカから帰国して入学した9月生編入生でした。逆カルチャーショックもある中、「異文化間コミュニケーション」という専攻との貴重な出会いがありました。今思えば、異なった背景や立ち位置によって起きる齟齬の悲しさに目を向け、相互理解への道を探る大切さをICUで学んだと言えます。

後に結婚し、一家でイギリスに移った1989年に出会ったのは、残念ながら、第二次世界大戦中に東南アジアで日本軍捕虜となった英国人たちの日本に対する憎悪と怒りの声でした。その声にショックを受けたものの、実際に彼らが日本軍兵士から受けた残虐行為を聞くにつけ、より深いショックを受け、またそのような自国の行為があったことも知らずにイギリスに来てしまった自分を恥ずかしく思いました。

英国人元捕虜との和解など決してあり得ないと思う中、ある時、元捕虜たちと日本人との英日和解礼拝という場に呼ばれ、加害者側として、日本の国の過去の過ちを初めて言葉にして悔いる祈りを捧げることができました。すると、思いがけない感謝が溢れ、涙が止まらない経験をしました。さらにその礼拝では、元捕虜の方達が和解の印として、私たち日本人に握手を求めてこられたのでした。

こんな「とんでもない」和解というものの出会いを経て、私は英国国教会の牧師となる道へと導かれました。そして、リーズ大学病院チャプレンとなり、病院で出会う様々な人たちに寄り添う仕事に従事しながら、機会ある度に英国人元捕虜及びご家族・遺族との和解のために、また交流のために僅かながらですが関わってきました。

そして数年前、夫のマーク(ウィリアムズ,マーク。現ICU国際学術交流副学長)がICUに呼ばれたため再び戻ってきたこのICUで、私はイギリスでの和解の体験を話し、「クワイ河収容所」という、日本軍の捕虜だった一人の英国人の手記の読書会を開いてきました。多くの学生、教職員、さらに同窓生と、この「クワイ河収容所」の読書会は何度も繰り返されています。そして読書会の仲間と共に、「ICU和解フォーラム」という名の下、和解の理解を深め、広める活動が生まれました。多くの学生たちと和解についての読書会を続け、JICUF財団の助成金を受けて数々の講演会イベント、泊まりがけのアジア学院でのリトリートなどを開催してきました。不思議な励ましを感じる進展にただ感謝です。

和解とは「旅である」と言います。道は長く、苦勞もあり、新たな出会いもあり、自分も相手も変えられていきます。ICUには「C」という基盤があります。その基盤である「キリスト」は、和解の希望をくださる平和の君です。分断の絶えない世界で、この希望は大事です。この「C」を基盤とする大学で学び、恩恵を受けた私たちには、神と人を愛すため、和解に生きるミッションが与えられているのではないのでしょうか。人間のリミットを超えたところにある「C」の希望の光を胸に、私たちがそれぞれ置かれた場で和解のための「旅」のために励まし合っていければと願います。和解を必要としている隣人が遠くに近くにいるからです。

このICUで「和解」を共に考え、探る旅にこれまで加わってくださったすべての現役の学生・教職員・同窓生の皆さんに感謝し、またこれからより多くの方々に、「和解の旅」にある希望を知っていただけたらという願いを込めて私からのご挨拶とさせていただきます。

When I was a September transfer student at ICU, I discovered Intercultural Communication as the perfect major for me, encouraging me to look for possibilities to mend the gaps, for which I remain truly thankful.

During my 30 years of living in the UK, after learning about the shocking past history between the Japanese imperial army and British POWs in Southeast Asia during the WWII, a significant turning point came for me when I was able to take part in a Reconciliation Service for British former Prisoners of War and the Japanese. As we, the Japanese attendees, were able to acknowledge and express in words our own country's past wrongs as a prayer of confession, I was suddenly overcome by a deep sense of release and outpouring of tears of gratitude. We then exchanged handshakes with the former POWs. This was my first encounter with the transforming grace of Reconciliation and I have been blessed with friendships with former detainees and their families ever since.

Since returning to ICU in 2019, I have been leading book groups with students, staff and alumni, starting with an inspirational memoir written by Ernest Gordon, a former British POW and translated by our own late Prof Kazuaki Saito. Through such book groups, an informal initiative, called "ICU Reconciliation Forum", emerged, organizing numerous lecture events and discussions on Reconciliation on campus, as well as summer off-campus retreats, supported by JICUF.

Reconciliation is a 'journey' with many obstacles as well as many discoveries. We are reminded that here at ICU, we have 'C' at the center. We are blessed to know 'Christ', the Prince of Peace, giving us hope for Reconciliation beyond our own failures and limitations. In this world fraught with divisions, it is my hope that we will continue to find encouragement here at ICU, including us the alumni, to take part in the journey of mending the gaps wherever we are.